

最優秀作文(中学生の部)

笑顔の輪が広がるたすけあい

弘前市立第二中学校 3年 平井陽向

「おじいちゃん、陽向でしょ。」

わたしががんばりを一番褒めて、喜んでくれた祖父が高齢者施設に入ったのは、コロナ禍が続く二年前のことでした。大好きな祖父が施設に入ってから、なかなか会いに行くことができませんでした。そして、コロナ禍が終わった今、祖父に会いに行くと、わたしの名前を時々思い出せない祖父の姿がそこにありました。施設での生活は、人との関わりによる刺激が不足しがちです。そのため、祖父の認知症は進み、人や物の名前を忘れていくことが多くなりました。

わたしは、小学生の時に高齢者サロンについて考えたことを思い出しました。その時は地域の商店をいろいろな年代の人たちがふれあえる高齢者サロンにしたいと思っていました。しかし、祖父が施設に入ったことをきっかけに、生活の場が制限されている高齢者の方もいきいきと楽しめる場がこれからは必要になってくるのではないかと考えるようになりました。祖父の他にも、何気なく日々を過ごしている高齢者がたくさんいるのではないかと思いました。祖父は、週に二回デイサービスに通うことを楽しみにしています。マッサージをしてもらったり、カラオケをしたりすると、時間があつという間に過ぎると話していました。

そこで、放課後の交流の場として、高齢者が利用するデイサービスと小学生のなかよし会を合体させることはできないかと考えました。高齢者の増加に伴い、地域に施設がたくさん作られています。高齢者サロンの一つの形として、施設に学童保育などを利用している子どもたちが遊びに来る環境を作るために、赤い羽根共同募金を活用することは双方にとってよいことがあると思います。自分の孫と同じ年頃の子どもたちとふれあうことは、高齢者のいやしや生きがいとなるのではないのでしょうか。募金で集められたお金をふれあいの場を作ることに使うことで、未来の人財である子どもたちが高齢者のことを理解するよい機会になります。また、高齢者は子どもたちに昔の遊びを教えたり、今と昔の違いを話して楽しんだりすることができます。祖父はわたしが会いに行くたびに孫だということを時々忘れていても笑顔になります。やっぱり子どもの力はすごいのだと実感しています。

認知症の推定人数の将来予測は増え続ける傾向にあるそうです。子どもたちとふれあうことで、暮らしにうるおいが生まれ、わたしが目指していた高齢者といろいろな年代の人たちがふれあえる憩いの場をつなげていくのではないのでしょうか。さらに、施設に入っている方の認知症のリスクを減らし、健康寿命を延ばすことにもつながるはずです。コロナ禍が終わった今だからこそ、赤い羽根共同募金で笑顔の輪が広がるたすけあいを実現させたいです。